





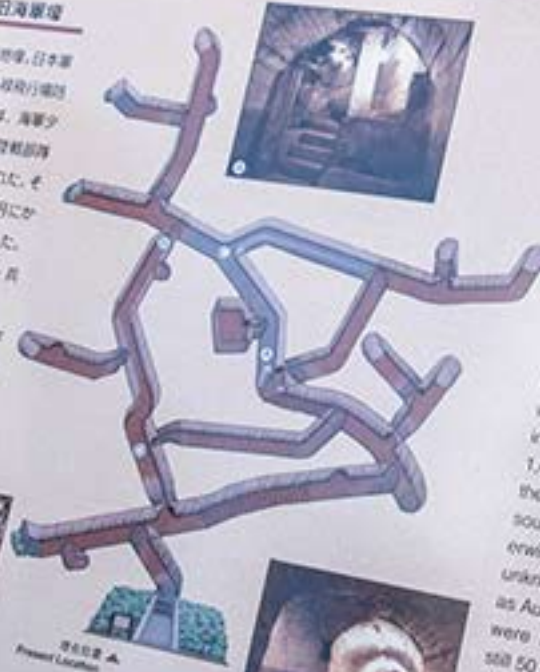


カテラムイ(野山)回廊壕

海軍航空隊司令部の本拠地である、日々軍は、この地を拠点とし、小規模な戦闘活動のため、小隊・班単位で、海軍少将大島実功の指揮下に連合隊司令部が編成され、多くの陣地壕が掘られた。その一つが本壕で、1944年8月から12月にかけて住民も動員して大規模な工事で行われた。総延長は約200mで、その中に司令部・兵舎・給水室などが設けられた。

1945年6月4日、米軍は飛行場のある宇都宮に上陸、戦況が知まった。6月7日、米軍はここカテラムイ系に激しい攻撃を加え、数日で制圧した。壕内には最大1,000人の兵士・住民がいた。東部への脱走は、難関者数ともに不明であるが、各月段階でも約50人が壕内に居残っていたとい

ふ。



Kateramui (Kotobukiyama) Navy Underground Headquarters

The tunnels served as the headquarters of the Iwao Corps of the Japanese Naval Base Force. The hill is known locally as Kateramui, and as Kotobukiyama to the Japanese. This was one of several Japanese underground fortifications carved out to defend Oroku Peninsula. Civilians were mobilized for the construction from August to December of 1944. The tunnels are 350 meters deep. On June 4, 1945, the American forces landed at Kagamizu. On June 7, a heavy attack was made on Kateramui, which was taken in a few days. The tunnels held as many as 1,000 officers, soldiers, and civilians, but the number killed in battle, relocated to the south, or are otherwise missing, is unknown. As late as August, there were reportedly still 50 persons in the tunnels.















フェーメーシチャグイ家のフール

このフールは、字田原のフェーメーシチャグイ家(屋号)にあったものです。フールとは、豚小屋と便所を兼ねた施設で、前にトーシヌミーという穴があり、そこで用便を済ませます。さらにその前に、しゃがんで体が隠れる位の石垣がありました。豚がいる場所は、約3分の1ほどに石づくりのアーチ屋根があり、床はトーシヌミーと接続する方へ向かってゆるやかな勾配がつけられ、石敷になっています。また、そこには、餌を入れる器を漆喰で固定してあった跡がわかります。

このフールの石積みの技法は、かなり凝ったものになっており、明治時代の終わりごろから大正時代のはじめごろにつくられたものではないかと考えられています。























































小祿ノロ殿内 (ウルクヌンドゥンチ)

宮内省小祿分庁

Former Site of Urukunun-dunchi



小祿のウルクヌンドゥンチの遺跡 (小祿のウルクヌンドゥンチの遺跡) 宮内省小祿分庁

琉球王国時代、首里王府より任命された小祿領の小祿村のノロの屋敷跡。ノロは正式には「のろくもい」と記されるが、通常「ノロ」または「ヌー
ル」と呼ばれ、管轄する1~3の村落のウマチー(稲やまび類)など農務
儀礼をはじめとする村落祭祀の中心的役割を担った。
15~16世紀にかけ「蘭清大題」を頂点とする神女組織が整備されると、
沖縄本島をはじめ奄美大島から八重山諸島にいたるまで、村落ごとに
王府からノロ(宮古「八重山ではツカサと呼ぶ)が任命された。小祿領
内には小祿・塩間・赤嶺・大嶺・具志の各村にノロが置かれ、管轄する
村や隣接する村落の祭祀に関わった。
阿屋家は屋号を「ノロ殿内」といい、王国時代、小祿ノロは代々阿屋
家の女性から任命された。1879年(明治12)の沖縄県設置により、王府
の任命によるノロ制度は崩壊したが、小祿ノロ殿内のようにノロが現在
でも引き継がれ、村落の祭祀に携わっている地域もある。
なお、阿屋家は、屋敷横の石畳道や石垣など戦前のたたずまいを襲
しており、往時の様子を今に伝えている。また、母屋の前の建物は「前の
殿内」といい、「ノロ火の神」を祀っている。

Here once stood the residence of the Nono
priestesses of Oroku hamlet, Oroku magiri, dis-
trict). Appointed by the royal government dur-
ing the Kingdom era, Nono priestesses were
central figures in the community's agricultural
ceremonies and other religious rites.
During the 15th and 16th Centuries, the King-
dom of the Ryukyu had a well-developed priest-
dom of the Oroku with Kase Okuni at the top of
the sacerdotal hierarchy. Each community had
a Nono (a Tsukasa in Miyako and Yaeyama) ap-
pointed by the government.
In the Kingdom era, the Oroku Nono was al-
ways chosen from among female members of
the Teyaya family. Hence, the Teyayas are called
by their byname, "Nony-dunchi". Today, the
family continues to be involved in religious rites
of the Oroku district.
The present Teyaya residence maintains the
appearance of homes of the prewar period, with
stone walls and a paved stone pathway on the
side on the premises.















































